

3) 明恵の足跡に見る歴史的風致

明恵と湯浅との関わり

明恵（明恵房高弁）は、華嚴宗再興の祖とも言われる鎌倉時代前期の高僧である。父は平重国、母は湯浅宗重の第四女で、承安3年（1173）に有田郡石垣庄東吉原（現在の有田川町歓喜寺）で生まれた。幼くして両親を相次いで亡くし、9歳の時に叔父である上覚上人に預けられ、京都・高雄の神護寺に入った。そこで、文覚上人のもとで華嚴宗の修行に努めたが、折しも奈良や比叡山では僧たちの横暴ともいえる姿が溢れ、仏教界が荒んでいた時代であった。神護寺においても僧たちの怠惰は著しく、戒律を破る者が目立った。



明恵上人像（高山寺蔵）

そこで明恵は、建久6年（1195）に高雄を出て、故郷であり、母方の祖父が治める地である紀州湯浅の栖原白上に入って庵を結び、ここで修行を始めることとなった。木々の隙間から刈藻島や鷹島が浮かぶ栖原の海が望めるこの地で、坐禅や写経に明け暮れた。明恵が修行中に詠んだ歌に「糧絶えて山の東を求むとてわ町へ行けぬことぞ悲しき」という歌がある。「わ町」とは、我が町という意で、湯浅の町場を指している。食糧が尽きたので托鉢に行きたいが、一族がいる湯浅の町ではいとも容易く食糧を得ること



西白上遺跡

とになってしまい修行にならないので、行くことが出来ない、という意である。明恵が、湯浅を故郷と理解していたことがわかるとともに、当時の湯浅が「町」と言えるほど栄えていたことがうかがえる。

この地は、麓の栖原に住む人々の生活音が聞こえて修行の妨げになるとして、ほどなくして谷を隔てた東の奥に修行の地を移している。最初の修行地を西白上、移動した後の地を東白上と呼ぶ。明恵はここでの修行中、仏に身を捧ぐため自らの右耳を削ぎ落としている。明恵の仏道への深い思いを伝えるエピソードである。

建久9年（1198）、神護寺に呼び戻されるも、再び白上の峰に戻って修行を続けた。この年の暮れには、白上から望める刈藻島で5日間の修行を行った。島内の波に削られて出来た洞窟に板を渡



施無畏寺境内から見た刈藻島

し、人々の喧騒からほど遠く離れたこの地で、明恵はひたすら読経に明け暮れたという。後年、「島殿」にあてた手紙を書いて弟子に託したという逸話が残るほど、明恵はこの島を愛していたようである。

明恵はこの年のうちには、白上を離れ、有田地方の各地で修行を続けた。この頃、釈迦の教えに深く帰依していた明恵は、釈迦への憧れのあまり、その足跡をたずねてインド（天竺）への渡航を計画している。春日明神の神託や自身の病により断念したが、『大唐天竺里程書』には綿密な行程が記されておりインドへの強い思いを表している。なお、春日明神の神託の逸話は能「春日龍神」の題材となっており、嘉永4年（1851）の『紀伊国名所図会』にもその場景が描かれている。建永元年（1206）には後鳥羽上皇より、神護寺の奥、^{とがのお}梅尾の地に^{こうざんじ}高山寺を賜り、その教えを広めていった。承久の乱の際には、敗れた上皇方の兵を高山寺にかくまったとして捕らえられ、鎌倉幕府の執権、^{ほうじょうやすとき}北条泰時の尋問を受けたものの、明恵の話を聞いた泰時は深く感銘を受け、以降たびたび政治や仏教を問うようになるなど、時の権力者にも影響を与える人物となった。

晩年には、栖原の領主で明恵の叔父にあたる湯浅^{かげもと}景基より、かつての修行地である白上峰の麓に建立した伽藍の開山として招かれた。寛喜3年（1231）4月、明恵が59歳の時であった。この寺こそ、現在も同地に開かれている^{せむいじ}施無畏寺である。明恵は、その翌年の1月、梅尾高山寺において入滅した。

このように、鎌倉時代初期の仏教界における激動の中、戒律を重んじる旧来の勢力である華嚴宗の教えを極め、その中興の祖とも言われる明恵は、母方の出身である湯浅一族との繋がりのもと、「わ町」と呼ぶ湯浅との間に深い関わりを持っている。

施無畏寺と白上遺跡

施無畏寺は、湯浅一族の支えにより白上山一帯に寺領を持ち隆盛を極めたが、湯浅一族が滅亡し、後の豊臣秀吉の南征で伽藍の多くが兵火にかかり、灰燼と化した。^{かいじん}現存する建物は全て江戸時代以降に再建されたものである。施無畏寺に残る室町時代の境内の様子を描いた絵図には、白上の峰から刈藻島までの範囲に、本堂や開山堂などのほか、多宝塔、大門、六坊といった現存しない堂塔も伽藍配置に見られる。また、東西の白上峰には卒都婆も描かれている。この卒都婆は、明恵の死後4年目にあたる嘉禎2年（1236）に弟子の^{きかい}喜海が、有田地方における明恵の修行地等に建てた木造の卒都婆を、康永3年（1344）に石造に改めたものである。現在もなお同地に建つ東西の白上遺跡は、史跡に指定されている。



施無畏寺境内絵図

現存する堂宇のうち、本堂・開山堂・鐘楼・鎮守社は、それぞれ和歌山県指定文化財となっている。これらは、室町時代の境内絵図と位置関係は同じである。本堂は貞享3年（1686）、開山堂は明暦元年（1655）、鐘楼は宝永4年（1707）の再建であり、鎮守社は18世紀の再建と見られる。このほか、施無畏寺には明恵と関係の深い古文書や寺宝が数多く残されており、東西白上遺跡や刈藻島の景観とともに、明恵^{ゆかり}縁の証を大切に守り伝えている。



施無畏寺本堂（右）と開山堂（左）

明恵上人^{おんき}遠忌法要

明恵が入滅してから 50 年に一度、遠忌法要が営まれる。施無畏寺に残されている『明恵上人五百五十回遠忌開帳絵図』には、明恵没後 550 回忌の安永 9 年（1780）に営まれた法要の様子が描かれている。芝居小屋がかかり、幟や提灯が並んで、大勢の参拝者で賑わっている様子が見て取れる。

最も近い法要は、昭和 55 年（1980）に「明恵上人七百五十回遠忌大法要」が営まれている。栖原の集落から施無畏寺まで稚児行列が練り歩き、大勢の参拝者で溢れかえった境内での餅撒きなど、盛大な法要が執り行われた。

次の八百回遠忌法要は、平成 42 年（2030）頃に執り行われることとなる。



明恵上人五百五十回遠忌開帳絵図



明恵上人七百五十回大遠忌法要の様子（写真右：稚児行列）

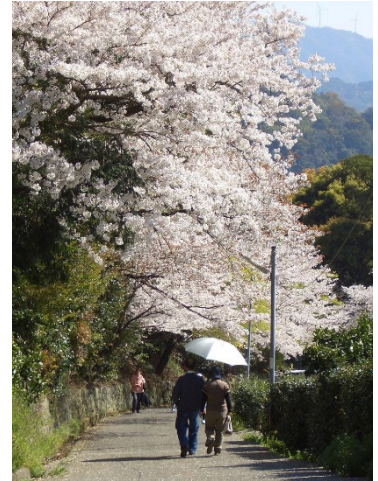


明恵上人七百五十回大遠忌法要の様子（写真右：餅撒き）

シガサンニチと施無畏寺開山忌に営まれる法要

施無畏寺では、明恵の月命日にあたる毎月 19 日に住職による勤行ごんぎょうが行われているが、明恵に関するものでは毎年 4 月 3 日の「シガサンニチ」と呼ばれる日に行われる「明恵上人会式」がある。シガサンニチは、元は農業を営む際のいわゆる農事暦のうじれきの一つで、集落全体の休日であり、山や海などに出掛けて休息を楽しみながら英気を養うとともに、その年の豊作を神仏に祈願するものである。旧暦では田植え前の時期であったが、新暦では桜の開花時期と重なり、お花見などが行われる。桜の名所としても名高く、境内や参道に多くの桜が咲く施無畏寺には、毎年多くの花見客が訪れる。

シガサンニチの「明恵上人会式」は、施無畏寺の本尊を祀る本堂ではなく、明恵が祀られている開山堂で営まれることから、明恵に対する会式であることが明らかである。会式の前日から檀家が集まり、開山堂周辺の清掃や、会式に使用する餅をつく。会式当日、開山堂には檀家たちや参拝者が集まり、健脚な者は桜並木が続く山道を登って白上遺跡に参拝する。開山堂で法要が営まれた後、集まった参拝者に餅撒きが行われるのである。



施無畏寺参道の桜並木



シガサンニチに開山堂で営まれる明恵上人会式

シガサンニチのほか、施無畏寺が開かれた 4 月 17 日には開山忌法要が営まれる。それは境内地だけにとどまらず、明恵が厳しい修行を積んだ刈藻島でも行われる。明恵自身が、単なる修行の地では片付けられない心惹かれる思いを抱いていた刈藻島は、明恵を尊敬し慕う者たちにとっても特別な場所である。昭和 57 年（1982）8 月には、施無畏寺の檀家をはじめ町民が中心となって、明恵の石造の坐像が刈藻島の西側、はるか彼方にあるインドの方角を見据える位置に安置された。それまで



刈藻島での清掃活動と法要

は、檀家や有志たちが数年に一度の頻度で刈藻島に船で渡り、島の清掃と法要を勤めていたが、坐像を安置した翌年からは、毎年草刈りや清掃を行い、法要を勤めるようになっている。

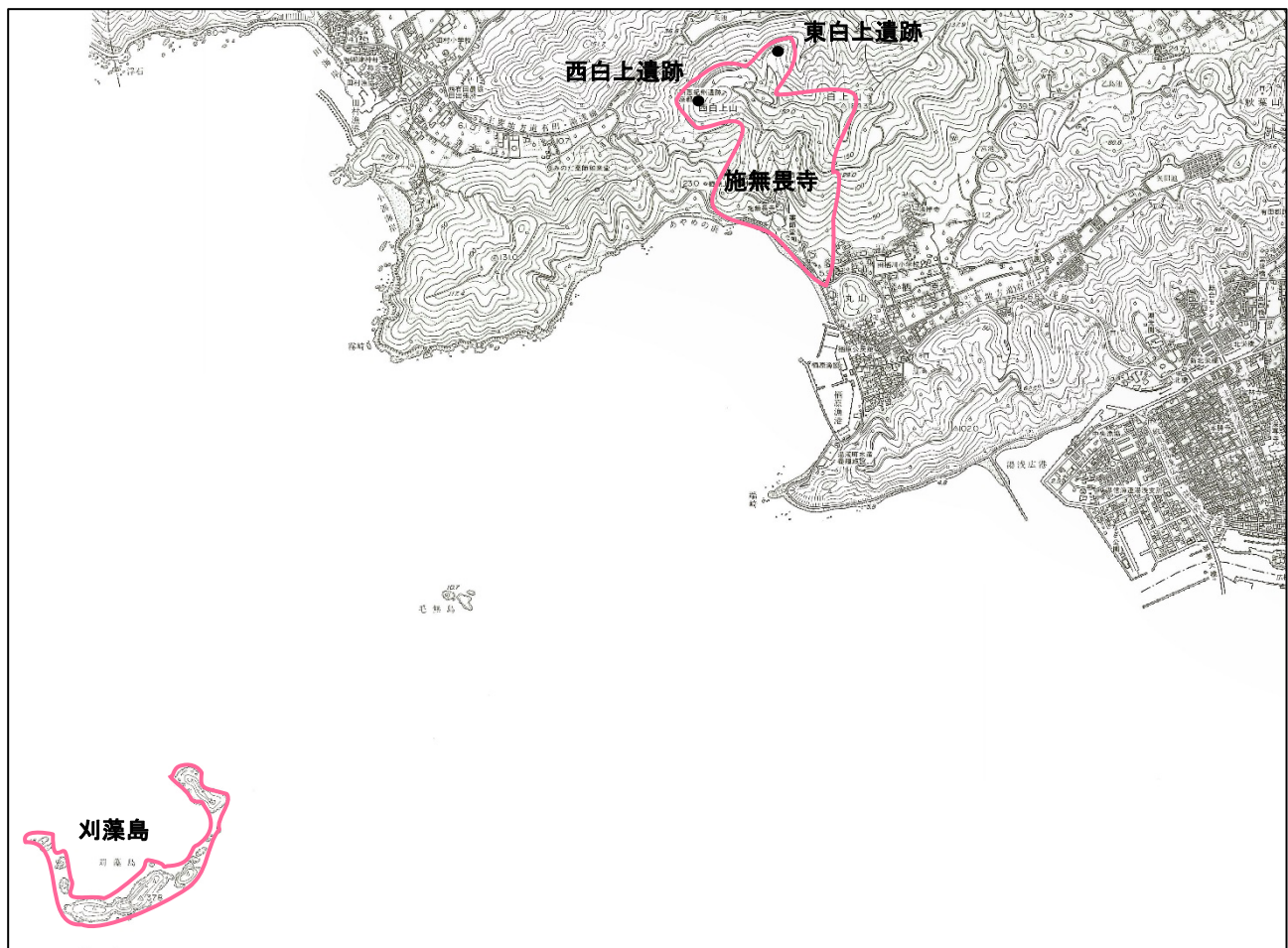
こうしたシガサンニチに行われている会式や刈藻島での清掃活動などは、最初に始められたのがいつなのか正確にはわからないが、施無畏寺の記録によると、シガサンニチの会式は昭和の初めに

はすでに行われており、刈藻島でのお勤めも、昭和7年（1932）の七百回大遠忌法要の際に住職らが船で島に渡り、法要が営まれている。

シガサンニチに行われる明恵上人会式は、明恵を敬愛してやまない人々の思いと土俗の風習が合わさり、「シガサンニチ」の言葉の響きとともに咲き誇る桜の四季の風物詩となっている。桜並木の参道を登り、若き日の明恵が厳しい修行に身を投じた西白上に立つと、春の陽光に輝く穏やかな海が眼下に広がり、栖原の集落とその沖にある刈藻島や鷹島が一望できる。刈藻島でのお勤めもまた、明恵が抱いていたインドへの憧憬と、この島に注がれた愛情に共感を覚える人々によって今日まで続けられている。施無畏寺を擁する白上峰と湯浅湾に浮かぶ刈藻島には、明恵が残していった足跡を自然の息吹とともに感じる歴史的風致が今なお息づいている。



西白上から望む湯浅湾の景色（刈藻島、鷹島、栖原の集落）



明恵の足跡に見る歴史的風致の範囲